様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ８ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２５２３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０９９７

研究課題名（和文）現代カンボジア仏教界における俗人女性修行者と論蔵学―タイへの越境と学び

研究課題名（英文）Female Lay Ascetics and Abhidhamma in Buddhist Cambodia Today: Learning Experiences in Thailand

研究代表者
高橋　美和（Takahashi, Miwa）

愛国学園大学・人間文化学部・教授

研究者番号：４０３０６４７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、カンボジア仏教界でおそらく初めて登場した「論蔵学(以下アビダンマと記述)を修め、教鞭をとる」俗人女性修行者（ドーンチー）2名に着目し、以下の調査を実施した。(1)カンボジアの俗人修行者の寺院生活に関する基礎調査、(2)上記2人が1990年代に教学のために滞在したタイでの経験を含むライフヒストリー・データの収集、(3)タイ、カンボジア両国におけるアビダンマ学習の実態調査、そして(4)2012年に行われた「ドーンチー研修」の参与観察を行った。その結果、上座仏教徒社会における出家／在家境界およびジェンダー秩序に生じつつある新たなダイナミズムの一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：　This study focused on the two prominent female lay ascetics (daun chi in Khmer), probably the first women in the Cambodian Buddhist society who "completed Abhidhamma studies and became Abhidhamma teachers". The research activities conducted during the research grant period were as follows: 1) gathering basic information about lay ascetics' life in Cambodian Buddhist temples, 2) collecting the life history data in detail on the two key informants mentioned above, including their experiences in Thail and where they stayed for Abhidhamma studies during the 1990's, 3) collecting information about the present situation of Abhidhamma studies both in Thailnad and Cambodia, and 4) participant-observation of the "Training Seminar for Daun Chis" held in 2012. As a result, I was able to figure out a few aspects of dynamism that are occuring in the monk/lay boundary and in the gender order in the Theravada Buddhist society.

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：カンボジア　タイ　仏教　俗人女性修行者　ドーンチー　メーチー　アビダンマ

## １．研究開始当初の背景

上座仏教圏においては、スリランカに続いて近年タイで女性の正式出家者（比丘尼）が誕生したことが知られているが、比丘尼の全国レベルのサンガ組織はタイではまだ存在せず、一般仏教徒の間で広く認知されているとは言い難い現状にある。従来からある、寺院に止住し、俗人カテゴリーに留まりながら出家者に準じた修行生活を送る女性たち（タイ語でメーチー）の方が人数としてははるかに多く、社会的に認知されて久しい。今日のメーチーには、教学試験上級合格者、女子仏教大学学長、社会活動家、瞑想教師、など、幅広い人材と実践がみられ、こうした諸活動についてはすでに筆者自身の過去の論文の他、海外の先行諸研究において言及・分析されている。

一方カンボジアにもタイ同様の俗人女性修行者（カンボジア語でドーンチー）が存在するが、ドーンチーの目覚ましい活躍や地位上昇はいまだ知られておらず、比丘尼復興が現地で話題になることもほぼ無い。1970 年代から 20 年余り続いた内戦時代を経て、1990 年代の復興期には仏教寺院の一部は身寄りを失った中高年女性たちのシェルターとも言うべき形で機能してきたという現実があった。1990 年代のドーンチーの多くが、ポル・ポト時代前後に夫や近親者と死別した肉親喪失者であったことは事実である。しかし、今日、ドーンチーの家族背景には多様性が見いだせ、修行目的の寺院住まいがむしろ主流である。そして、こうした現代カンボジアのドーンチーの多様な状況については、まだまとまった研究が無い。

## ２．研究の目的

本研究は、こうしたカンボジア国内状況や研究状況をふまえ、1990 年代になされた、カンボジア人俗人女性修行者のタイでの教学学修およびその後の教育活動を焦点としつつ、その背景や一般信徒の宗教実践を広く調査し、これによって上座仏教社会における出家者―俗人修行者―在家者（一般俗人）という三者の関係性および仏教徒社会におけるジェンダー状況の再検討を目的とした。

本研究の中心的対象は、カンボジア仏教界においておそらく初めて登場した、「教学を修めた後に教学教師として教壇に立つ」ウム・チア（1961～、以下 UC と記述）とパオ・ソマリー（1964～、以下 PS と記述）という 2 名のドーンチーである。この 2 名のライフヒストリーを追うことが第一の目標であった。さらに、一般ドーンチーの生活実態を視野に収めつつ、教学の中でも特に論蔵学（以下、アビダンマと記述）学習の現状と広がり、教学をめぐるカンボジアとタイとの人的交流の実態、またアビダンマ学習がもたらすドーンチーの地位変化の兆しについて、検討することとした。

## ３．研究の方法

本研究は研究対象人物のライフヒストリー詳細と、そのライフヒストリーの背景状況と現況調査とからなるが、具体的には主にキーインフォーマントである 2 名のドーンチー、その関係者・関係機関の聞き取り、現地語（カンボジア語とタイ語）資料の収集、関連する研究論文の検討、および現況に関しては必要に応じて参与観察によるデータ収集という複合的な方法をとった。現地調査は必要に応じて、カンボジア・タイのどちらか、もしくは両方で行った。

調査内容ごとにまとめると以下の４つである。

(1)　カンボジアの俗人修行者の寺院生活に関する基礎調査

(2)　教学教師のドーンチーUC と PS が 1990 年代に教学（の中でも特に論蔵学＝Abhidhamma、以下アビダンマと記述）学修のために滞在したタイでの経験を含むライフヒストリーの記録

(3)　アビダンマ学習の実態調査

(4)　カンボジア初の「俗人女性修行者研修」の参与観察および、研修講師の一人であった UC の講演内容の分析

## ４．研究成果

以下、調査別に記述する。

(1)　カンボジアの俗人修行者の寺院生活に関する基礎調査

①　本科研以前の 2009 年・2010 年に実施した、コンダール州キエンスヴァーイ郡の寺院および止住者（僧侶および俗人）に関する悉皆調査のデータ整理。これにより、本研究の対象である俗人修行者の生活実態の一部が明らかとなり、本研究の基礎データとなった。同年にコンポントム州を担当した小林知との共著で分析結果の一部は発表済みである（図書①）。

②　プノンペン市内の俗人止住者（女性修行者：ドーンチー／善女：ウバーシカー、男性修行者：ターチー／善男：ウバーソック）集住寺院 3 ヶ所にて、予備的な聞き取りを経た後に、質問紙調査を実施。寺院止住俗人のほとんどを女性が占めることは 1990 年代の調査結果と同様であったが、「内戦による肉親喪失のために老後を寺院で過ごす」式の寺院止住が今や少数派であることがわかった。俗人カテゴリーにとどまりつつ、寺院構成メンバーとして様々な役割をドーンチーが果たしている。自ら食を確保することを律（vinaya）により禁じられている出家者（僧侶）のために、特に都市中心部の寺院では、一般在家からの食の布施を適切にマネジメントするという重要な役割をドーンチーが

果たしていることが明らかになった（論文①）。ただし、ドーンチーの多くが高齢で非識字者であることから、教学への関心はごく一部の比較的若い修行者に限定されることも確認された。

(2)　教学教師のドーンチーUC と PS が 1990 年代にアビダンマ学修のために滞在したタイでの経験を含むライフヒストリーの記録

UC と PS への聞き取りは 2004 年より断続的に続けてきたが、本科研助成期間に詳細な聞き取りを行い、直近の情報を追加収集するとともに事実確認を補完した。

1980 年代後半～1990 年代初頭に 2 人は剃髪してドーンチーとなり、以降寺院止住の修行者として今日に至る。
↓
1992 年に、タイのスリン県（クメール民族が多く住む地域）の寺院へ渡り、タイ語とアビダンマの基礎を学ぶ。
↓
1994 年頃よりバンコク市に移動、アビダンマ教育中心地である、マハータート寺内のアビダンマ学校に通学し、アビダンマ中級・上級を学修、全ての課程の試験に合格。
↓
1999 年にカンボジアに帰国。2000 年頃よりアビダンマの講義をプノンペン市内の寺院で開始。後に止住寺院をコンダール州コホ・トム郡の寺院に変更。同寺院およびプノンペン市内の寺院での講義を続行。
↓
2012 年、ドーンチー研修で UC が講演。
↓
数カ所の寺院でのアビダンマ講義と並行して、2013 年より、シハヌーク仏教大学の講師も務める。教科書の執筆と出版。

さらに、2 人が 1990 年代にタイで止住した寺院 2 ヶ所（スリン県とバンコク市）を訪問し、当時の状況についてタイ側からも調べた。2 人の身元引受人であったタイ人僧侶、教学の級友であったタイ人女性修行者（メーチー）にも聞き取りを行った。

(3)　アビダンマ学習の実態調査

カンボジアでは UC と PS の授業（コンダール州とプノンペン市）に参与観察した。生徒には僧侶や俗人男性も含まれるが、ほとんどが俗人女性もしくは俗人女性修行者である。カリキュラムは、聞き取りによれば、タイで学んだときのカリキュラムを元にしている。カンボジアの仏教大学のカリキュラムにおけるアビダンマの位置づけについても、仏教大学講師に聞き取りを行い、若干の情報収集を行った。カンボジアでは、世俗科目も含む教育課程である現行の仏教教育課程の中での仏教関連諸科目が教学に相当し、学習者はほぼ 100%僧侶である。アビダンマは教学の一部に過ぎず、概説を学ぶにすぎない。現代カンボジア仏教界でアビダンマ専門の講師は UP と PS 以外にはいないといってよい状況である。

タイでは、アビダンマ学習の総本山がバンコク市マハータート寺境内にあるチョーティカ・アビダンマ学校であるため、ここでの聞き取りや授業の参与観察が主たる調査活動となった。かつてメーチーが多く学んだここは、現在の学習者のほとんどが一般俗人男女（女性の方が多い）であり、定年退職した元公務員といった高学歴者が多い。教師は、僧侶だけでなく、この学校の卒業生であるメーチーや一般俗人も務めている。タイでは、教学試験として仏教史・仏教基礎事項を学ぶナック・タムとパーリ語・仏典解釈学を主とするパリエンの 2 つが僧侶の位階のために重要であると考えられているが、アビダンマはそういう位置づけではない。しかし、ミャンマー留学歴のある僧侶や元僧侶は、アビダンマの重要性を主張している。

(4) カンボジア初の「俗人女性修行者研修」の参与観察および、研修講師の一人であった UC の講演内容の分析

この研修は、カンボジア宗教省が主催したもので、プノンペン市内の一寺院を会場として 2012 年 12 月 25～27 日に開催された。宗教省は 2009 年から寺院付きの俗人祭司、アチャー（そのほとんどが男性）を対象とする研修を複数回行ってきており、ドーンチー研修はこれに続くものと言える。講演を行う人々のほとんどが指導的立場の僧侶たちや宗教省幹部たちであった中で、ひとり女性だったのが UC であった。彼女のスピーチでは、ドーンチーが一般の在家信徒とは異なる修行者という地位にあることを明言すると同時に、修行者が出家者と同様、解脱への道を歩むことが努力次第で可能であると述べ、カンボジアにおける女性修行者の位置づけに関して画期的な発言を行っている（スピーチ全訳を含む分析は論文②）。

まとめ：

以上のように、カンボジアの教学ドーンチー2 名のライフヒストリーを追いつつ、アビダンマの今日的状況と 2 国における位置づけについて様々な情報を得ることができた。上記(4)のように、カンボジアにおける宗教行政の中にドーンチーが新たな位置づけを与えられる現場に居合わせることもできた。「寺院＝シェルター」としての修行生活ではなく、自ら選びとった道としてドーンチーとなり、教学を修めた後に、僧侶を含む学習者に教学を講じるという、カンボジア仏教徒社会にとっては新たな修行者モデルを体現する UC と PS と、その周辺の事象を多角的に調査した結果、上座仏教徒社会における僧／俗人境界が教学を通して越えられている一面がある

こと、また、「(男性）僧侶に対し劣位にある俗人女性修行者」というステレオタイプとは異なる、教学を講じる女性修行者の誕生が、従来型の寺院構成員および一般の仏教徒社会におけるジェンダー秩序に、今のところ限定的ではあるものの一定のインパクトを与えていることが確認された。

今後の展望：
　以上、カンボジアにおける教学教師の誕生を軸に、俗人修行者の宗教実践の現代的様相を探って来た。前述のように、(1)、(2)、(4)については報告書や論文・研究ノートの形で発表したが、(3)については未発表のため、文献資料の補足的渉猟を行った後に発表する予定である。さらに(1)～(4)を統合した論考を近いうちに発表する計画がある。
　アビダンマ学習がカンボジアでどの程度広がって行くのか、またその広がりがカンボジア仏教界あるいは仏教徒社会にどのような変化をもたらすのか、そこに果たす俗人女性修行者の役割はどのようなものか、教学が男女両方によって学ばれる場合、仏教界のジェンダー秩序にどのような変化が生じるのかといった、より広い視野での考察・分析が今後の課題である。また、すでに教学の歴史の長いミャンマーの女性修行者（ティラシン）との比較考察なども含む、上座仏教地域全体の様相を把握し検討するための共同研究の可能性も探りたい。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）
① Takahashi, Miwa、Food Supply in Cambodian Buddhist Temples: Focusing on the Roles and Practices of Lay Female Ascetics、*Southeast Asian Studies*、査読有、forthcoming
② 高橋　美和、教壇に立つ俗人女性修行者―カンボジア仏教界における女性の進出動向―、東京外大　東南アジア学、査読有、19号、2014、128－146
③ 高橋　美和、食の供給と持続から見たカンボジア仏教寺院―俗人修行者に注目して―、総合人間科学、査読無、1 号、2013、91－105
④ 高橋　美和、俗人修行者への質問紙調査結果より－カンボジア、コンダール州キエンスヴァーイ郡―、宗教と地域の時空間マッピングニューズレター、査読無、5 号、2012、1－8
⑤ 高橋　美和、俗人女性が寺院住まいの修行者になるということ－カンボジアにおけるドーンチーと母娘関係―、愛国学園大学人間文化研究紀要、査読無、14 号、2012、1－12

〔学会発表〕（計２件）
① 高橋　美和、食から見るカンボジア仏教寺院―食の供給・持続と信仰・実践―、女子栄養大学栄養科学研究所第 7 回食文化経済学研究会、2013 年 7 月 12 日、女子栄養大学
② 高橋　美和、家族周期から見た宗教実践－カンボジア仏教徒社会における母子関係のジェンダー比較、国際ジェンダー学会、2011 年 9 月 11 日、東京家政学院大学

〔図書〕（計１件）
① 高橋　美和　他、京都大学地域研究統合情報センター、宗教実践を可視化する―大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動―、2014、143 ページ（担当部分共著、高橋　美和、小林　知、69－77、79－82

## ６．研究組織
研究代表者
高橋　美和（TAKAHASHI, Miwa）
愛国学園大学・人間文化学部・教授
研究者番号：４０３０６４７８